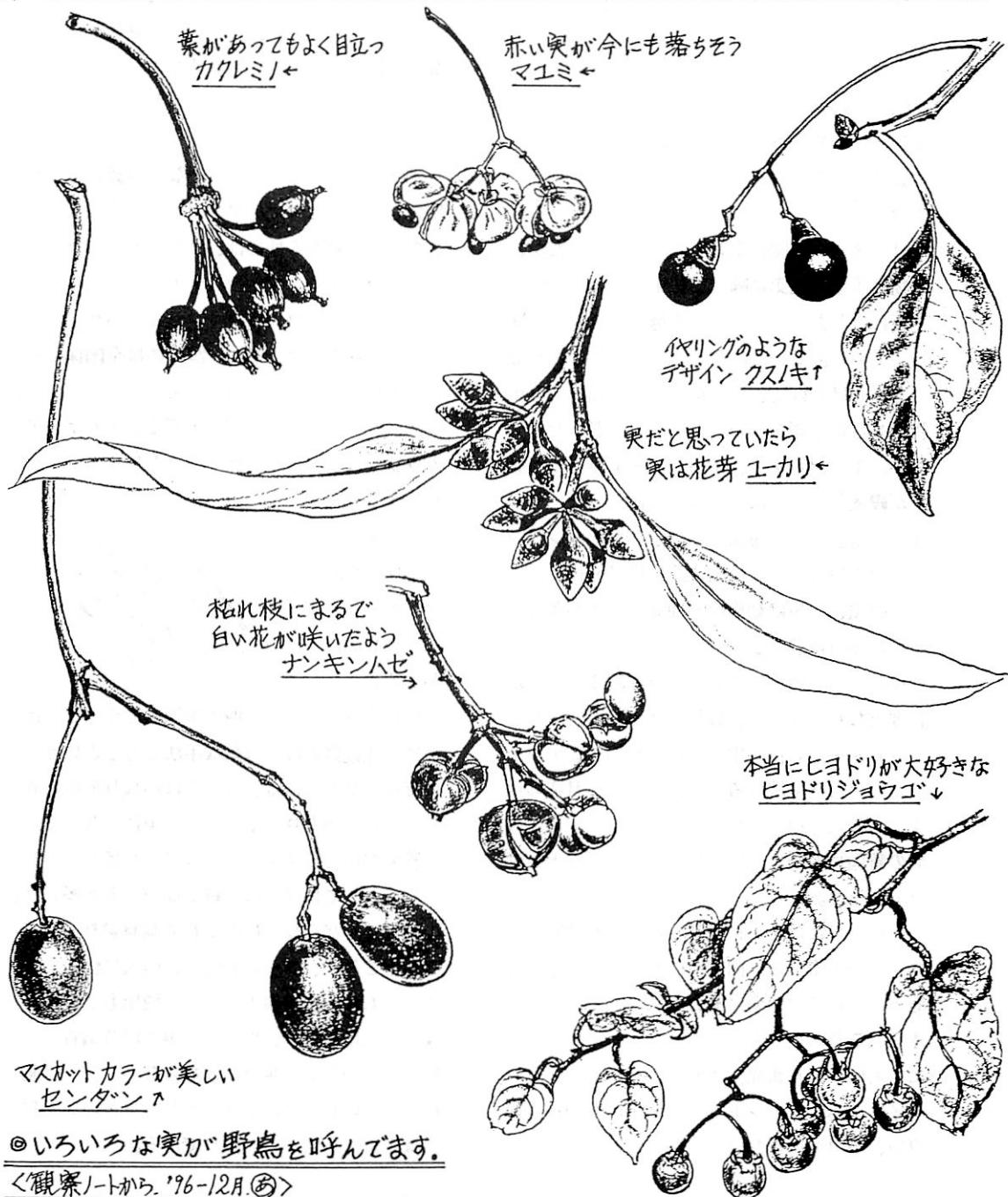


協議会ニュース

60号

愛知県自然観察指導員連絡協議会 1996.12



昭和49年、下の娘がまだ学生だった頃の夏、親戚から生後3カ月程の柴犬を「1匹では淋しかろう」との娘の言い分で雄犬を2匹貰ってきて、鼻が黒く熊に似た方をフー、やや細身で狐面の方をスーと命名した。



ひとまず、玄関の土間で飼うことにしたが、履物を手当り次第に噛って往生した。半年程して表に出したら、今度は塀を越えて道路を2匹揃って駆け回るようになり、車を急停車させることもしばしばで、止むなく業者を頼んで3m程の高さに金網を塀の上に巡らして貰ったりしたが、1年足らずで、精悍でリード役だったスーが齧死してフーは一人ぼっちになった。その後フーは、スーを撥ねたと思しき車のエンジン音を聞き分けては、執拗に追い掛け続けた。

その頃、小生は勤務校の独立の仕事が難行し、時には途方に暮れるようなこともあったが、帰宅後、フーを連れて農道を1時間程歩くことが日課となり、フーも、暮れのサイレンが鳴るとシャッターから首を出し、小生が帰るまでハチ公まがいに待ち続けるようになった。月夜の道を、古い歌を口遊びながらフーと歩く中に、昼間の難題にも明日への道が開けたことなども度々であった。

休みの日には、半日程勝手に決めた観察コースをフーと歩いた。田圃道、野中道、山路、湿原と、それぞれの所にそれぞれの顔があり、四季それぞれの姿がある。そして、一寸オーバーに言えば、毎日新発見がある。春の道で、トウカイタンポポとカントウタンポポの萼の長さの違い、ハコベの花弁の5枚が10枚に見えるこ

と、ヘビイチゴとオヘビイチゴの小葉の数、スズメノエンドウとカラスノエンドウ、オオイヌノフグリとタチイヌノフグリの柄の長さの差、ギシギシとスイバの穂中の葉の有無などを知り、湿原では、希少種のヒメコヌカグサ、ヒロハノコジュズスゲ、ミタケスゲ、サギスゲ、ミカワイヌノヒゲ、サワラン、トキソウ、ミカワバイケイソウ、サクラバハンノキなどの健在ぶりを確認し、山ではヤマイワカガミの花色のばらつきを見る。夏から秋には、カワラナデシコ、オミナエシ、キキョウ、キバナアキギリ、ツルニンジン、ミヤマウズラ、エンシュウハグマなどが次々と花をつけ、また、湿原には全国保全種のミカワシオガマを始め、ミズギク、スイラン、ホソバリンドウ、ツクデマアザミ、ナガボノアカワレモコウ、ヒツジグサ、フトヒルムシロ、ヒナザサ、そして、ウメバチソウが秋の湿原のフィナーレを飾って、高原に冬が来る。



任意のフィールドを四季を通して歩くことは、殊に生態観察の最も有効な手法であると思う。ロゼット葉などには、成体とはかなり形態の異なったものがあり、歩いている中に「なーんだ」と答えが出て苦笑することなどもしばしばある。それも一人ではなくなかなか続かないことが多いが、小生は「牛ならぬ犬に引かれて湿原参り」と言ったところか、フーのお陰で、他人に怪しまれることもなく、仕事のピンチの脱出も、健康も保全も、増してや、現在の仕事「群落調査」の物指もこの時期の賜物に他ならない。フーは昭和62年の夏13歳で死んだが、フーのいた日々は有難くも懐かしい限りである。

会員紹介

ふるさとの自然を守る

大宮克美（尾張支部）

伊良湖で講習を受けて4年になる。あちこちの観察会に出掛け学びたいと思うのだが、専業主婦としては土日に出るのは難しい。未だに4年前と同じ状態では、自分でも情けないと思う。

しかし、力が有る無しにかかわらず、残された自然を守りたいという気持ちに変わりはない。などと考えている時、犬山市の中央を流れる（南→北）新郷瀬川の堤に豊かな自然が残されていることを知る。クサボケ・スズサイコ・オカトラノウ・カザグルマ・カワラナデシコ・ワレモコウなどの植物が四季を彩り、バン・オオヨシキリ・カルガモ・コガモ・カワセミ・クイナ・サギ類などが飛び交う。途中の2号橋からの眺めは格別で、山や田畠と相まって遠い昔の心の風景そのままである。

この川は80年前に入鹿池の排水路として作られた用水で、自然河川ではないが、それだけに築造に携わった人々の思いは深く、手入れも行き届いていたのかもしれない。昔を知る人の「盆や月見の花を摘む堤と、自分たちの遊ぶ堤は分けられとった。」という話は印象深い。

数十年前であれば、当り前の自然であったかもしれないが、こんなに残っているところは犬山でもあまりない。よく考えればこういった日々の暮らしの中に息づく自然、この当り前の自然が一番無くなっていることに気づくのである。

この川も例外ではなく、防災のため下流から護岸工事が進められてきており、もっとも自然が残されている堤の工事が来年あたりから始まる。何とか残せないものかと、同好の仲間と「スズサイコの会」を作り、つたない観察記録や要請書・要請署名を市や県に提出するなど、ささやかな活動を昨年7月より行っている。専門的な知識も力もないが、自然の恵みを受け、そのすばらしさを知る者であれば、自然保護への思いは変わらないと開き直ることとした。主婦

とは、本当に恐れを知らない人種である。

「今、自分の町でどんな問題が起きているのか。自分はいったい何ができるのか。」と考えながら、これからもふるさとの自然を守るために行動していきたいと思う。

アユがいた！

吉村 晓夫（知多支部）

東海市に移り住んで14年が過ぎようとしています。知多半島には大きな川もなく、こどもの頃、豊川（東三河を流下する一級河川）で見たアユやテナガエビの姿は幻だと思っていました。ところが、1994年に東海市の横須賀新川で、この二種どころかオイカワも見ることができました。いずれも清流の生物というわけではありませんが、この川の水源は鎌ヶ谷池という愛知用水から水をとっている溜め池で、生活排水が流れ込まないということもあり比較的水はきれいであると言えそうです。アユやオイカワはそこから流れ下ったものではないかと推定できます。でも、アユの方は体長が10cmあまりで、海から上がってきたとも考えられました。今年の夏、横須賀新川の本流である知多市の信濃川で、20cmを超すアユが捕まったということが新聞で報道されました。大きさからすると、海から上がってきたのではないように感じました。10月8日に娘を連れて横須賀新川へ出かけました。堤防沿いを歩いていると、泥白色の護岸の一部が黒っぽくなっているのに気づきました。アユのはみあとでした。さらに捜してみると、同じような群れが他に2つ見つかりました。時期や大きさから考えると、海から上がってきたが、十分な食物がなく成長できていないという感じでした。この近くには、メダカやドジョウの棲む水路や、毎年カブトエビが発生する水田など、その気になればおもしろいものが見つかります。ささやかな楽しみとして、この場所の観察を続けていきたいと考えています。

〔話題の地見学会結果〕

弥勒山麓の公園計画

協議会に今まで不足していた自然保護について直接考へるという機会を作るために、この見学会を企画しました。協議会としては実際に開発反対運動を行う気はありませんが、少なくともこうした問題を会員が考え合う場を設けることは必要と考えたからです。

その1回目として、春日井市の弥勒山麓の公園計画の実施場所を10月26日に見てみました。参加者は13名で、その概要是山田さんの文のとおりです。その際に考えしたことなどを次にまとめてみたので、皆様のご意見をお聞かせください。

堂本暁子著「生物多様性」（岩波ライブラリー）の本の中に次のようなことが書いてありました。富山市の西に連なる呉羽丘陵は、コナラ・アカシデ・キタコブシなどの二次林が被い、オオタカの生息地、野鳥の越冬地などとして良好な地域であったが、林野庁の補助事業である健康とゆとりの森整備事業により、管理道路や施設が作られ、林相改良としてかなりの伐採や樹木の植栽が行われたといいます。

これを読んで、愛知県でも同じようなことが行われたと感じました。現地を見終わった印象は、鬼頭さんの文にあるように、自然との共生とはいってもそれを具体的に進める段階になると、技術的問題、価値観の違いが大きな障害になると感じたことでした。

弥勒山麓の自然を一般の人に楽しんでもらおうというのがこの公園計画の目的ならば、この点については問題はないでしょう。しかし、そのための方法や認識においては相当の隔たりがあるようです。

まず、何事も計画を樹てる際には、現地の状況十分を把握することが必要と思われます。地

域の自然の状況に応じて、保存する部分や開発の方法が検討されるという手順が要ります。制度的に不要であっても環境アセス的なことも行うべきでしょう。富山県の場合もこうした事前調査が不十分でした。

第二に、計画には地域の良さを生かすことが望されます。特に、公園計画などは地域の自然の良さを十分生かすことがこれからの方針と思われます。弥勒山周辺の自然は、実際に歩いてみると思ったより良好な森でした。樹種も多く、湿地を含めて草花も変化に富んでいます。こうした良好な自然を一般の人が楽しめることを前提とした計画が作られるべきでしょう。それが、その場所に合った個性的な施設を作ることにもつながると思います。

第三に、施設計画では貴重なものを残すよう配慮するとともに、利用者に自然の良さを理解してもらえるようここまで配慮したいものです。そうすれば、管理道路等がアカシデ林や湿地などを壊して通ることはないでしょう。

しかし、自然との触れ合いに関して相当な認識の違いがあります。私たちは、常に現地の自然を生かすことを考えたいと願っています。一方で、自然の中には行きたいが草木が茂る森は恐いと思い、アジサイやツツジの花は奇麗と感じるがサカキやネジキの花には気が付かないというような人も多くいます。行政としてはそういう人達を対象に、歩きやすいと思える道や開放的な空間を作るのが一般的です。アジサイの道なら人は来るが、コナラの森では人を呼べないということもあるかもしれません。また、公園内で怪我をした場合に、すぐ行政が責任を問われることも多く、煙草の火の不始末に平気な人もあり、それらに対して行政が気を使うのも無理からぬ点があります。こうした違いをどのように調整していくかがこれからも何回とな

く繰り返される課題でしょう。しかし、一度失われたものは戻ってきません。そこに自然を愛する者のあせりもあります。

そうした中で、雑木林の良さに気付き、二次林の中に園芸用のアジサイやマテバシイがあるのを不自然に思うような人を増やしていくこと、さらに自然の中に入るにはそれなりのマナーがあり、自主的な行動の責任は自分で持つべきことなどを伝えるのが、岩崎さんの文にあるように自然観察指導員の役割ではないでしょうか。自然を一つの財産と考え、それを使う場合には、その内容を吟味して有効に使わないと将来に悔いを残すことになることを広く伝えていきたいものです。

(事務局)

当日の状況から

山田果代乃（尾張支部）

弥勒山麓に続く築水池周辺は、緑に被われた里山で自生樹種はざっと 130種余り、草花ではまだ確認できないままである。或る日、何の前触れもなく突然大量の伐採が行われ、見るも無残な姿に変貌してしまった。その後、2万数千本もの庭園樹が植栽され、まるで平地と同じ公園と化し、毎年訪れていたオシドリはすっかり遠のき、リスやノウサギなど数多くの生き物達がどんなにおびやかされただろう。

これは、国の補助事業により愛知県と春日井市が進めている整備事業で、管理道や散策道を設け、周辺の植生を改良するものです。さらにもートキャンプ場などのレジャー施設も検討されているという。このため、昨年6月に住民による弥勒山麓の自然を守る会が結成され、県や市に対して計画の見直しなどを要請している。

見学会当日は、あいにくの曇り空で、雨がポツポツ落ち始めたが、さほどのこともなく出発となる。

足元が滑りそうな不揃いの急な階段を真下に下りると、築水池が眼前に現れ、池に流れ込む入口の沢向こうには、わずかに手付かずの湿地

が残され、絶滅危惧種などが生き続いている。しかし、今年に入ってから急激に犬の散歩、釣り人などが入り込み今後のなりゆきが気になる場所である。手前の岸に沿って曲がり込む形で北岸に入ると、植栽されたアジサイ・クチナシが我が者顔にしっかり根付き、周囲はすっかり刈り払われてしまっている。切り株が散在する斜面には、アラカシ・ネズミモチ・エゴノキなど伐採と同種のものや、マテバシイのように海岸性のものなどが多量の肥料とともに植え込まれている。

曲がりくねった遊歩道は、斜面中腹を削り、小さな谷間や湿地などをコンクリートのハッ橋や階段でつなぎ、幼児やお年寄りには厳しい砂利道となっている。両側に残された樹々は一様にひょろ長く、もたれかかる様に倒れ込んだり、折れてしまったものや、「これがタカノツメ?」と言いたい程葉も樹形も変形していたりなど、次々異常さが目についてくる。

階段下で「あっ何かが死んでるうー」の声にどれどれと2~3人がのぞき込むがどうやらヒミズらしい。モグラのように死ぬ時はやはり地上にはい上がるのであろうか。左斜面にむき出しとなった太い切り株に「あれ! 全部マンサクじゃない?」の声に思わず「うわー勿体ない」「惜しい」と誰もが同感の様子。伐採樹は生かされることなく、丸太となって斜面下方に転がされ、池の岸辺近くはこれらの残骸が帶状に連なり無残に放置されたままである。

このあたりから造園業者の草刈りは中断しているらしく、エノコログサ、コセンダングサ、ヒメムカシヨモギなどがはびこる中に、切り株から芽吹いたアオハダ、ネジキ、ソヨゴ、ツツジ類などが地面すれすれに精一ぱい手を広げている。その小枝には、「守る会」の人達のささやかな抵抗のあかしである「切らないで」の工事が点々と残されている。今後どのような見解がなされるであろうか。

ばらついていた雨もどこへやら、ようやく木道の見えるあたりにたどりつく、ここは斜面の中腹を貫くように道が敷かれ、谷間にには湧水を

ためこんだ小さな池があり、ヒルムシロの浮葉がただよい、サワギキョウもわずかに色をとどめている。尾瀬のように平坦な湿原の木道はその部分が痛むだけですむが、斜面の湿地はそれによって、全体が破壊されてしまうと専門家は言っている。左手は急斜面がせまり固かったウメバチソウのつぼみがようやくほころび、純白の可憐な姿を浮き上がらせている。ヘビノボラズも今は実を赤く染め、顔にぶつかりそうな所にぶら下がっている。前方の急斜面を登りつめると再び湿地が現れ、ミミカキグサ、ホザキノミミカキグサ、トウカイコモウセンなど貧栄養だからこそ生き残ることの出来たこの丘陵地に何とシラカシ、エノキ、アラカシなどが多量の肥料と共に点々と植栽され、アジサイなどは大きなかたまりとなってすっかり根付いている。このため、以前には全く見られなかったセイタカアワダチソウ、オオアレチノギクなどが一斉に生い茂っていたのを、5日前に「守る会」の人々の意見で刈り取られたばかりである。壊されかけている湿地はここだけでなく、名付けて「松の木湿地」「クロバイの湿地」「栗の木湿地」など計5カ所に及んでいる。表面は一見して見晴らしのよい憩いの遊歩道であるが中身は傷付き病んでしまっている。

突き当りの湿地を最後に尾根への階段沿いはもうすでに整備が行き届き、びっしり植え込まれたコムラサキ、ニシキギ、ナンテンなどは一方的に保護され、その周辺は奥の方まで中低木の切り株は勿論、すべてが地面すれすれまで切りこまれてしまっている。やり場のない怒りを押さえながらも、結構お腹の虫は順調で、一同遊歩道の真中を囁むようにお弁当となる。めいめいてんでに談笑の中誰かが「ウワー野鳥がいっぱい来たー」と叫んでいる。見上げるとオオバヤシャブシに群がった小鳥たちが実の隙間から小さな種を器用につまみだし、さえずりながら夢中になってついばんでいる。マヒワであろう。こんな近くで目撃できようとはラッキーとうれしくなってしまう。

食後には、浅見さんがどこから見つけだした

のであろうか棒の先に何やらひっかけて下げて来た。説明によれば、ノウサギとか。体の部分はもうすっかり失われ、骨格と足の部分と爪が残っている。自然死なのか他の動物に襲われたのか定かではない。

午後からは、一列で急な斜面を沢に降り、弥勒山に向かう。通称ダンプ街道を横切り、粘土屑の斜面を登り詰めると大谷林道に出る。

ここにも湧水が見られ、ヤマザクラ、ウラジロガシなどが残され、足下にはスイカズラ、ノイバラ、ヘクソカズラなどが繁っている。山腹の一部には、ツブラジイを高木に、アラカシ、ソヨゴ、サカキ、ヒサカキ、ヤブツバキ、シキミなど常緑広葉樹林帯の形態をとどめ、かつては自然林であったことを物語っている。ダンプも走れる幅広い林道をだらだらと登る途中、右斜面にセンブリを確認する。

今年工事を終えた管理車道の砂利道へ出る。削り取られた右側斜面は、被せられた泥土の下から金網がむき出しとなり、その下にはブルーのビニールシートがはみ出し、湧水が側溝へと流れ出している。あまりのずさんな工事にあきれるばかりである。他の斜面は泥土に仕込まれたヨモギ、イヌビユなど種が芽吹き、緑が回復したような錯覚を起こさせている。昨年はアケボノソウの群落が見事に咲き誇っていたとか。すっかり楽しみを奪われてしまった恨みの場所である。幅広くカーブした車道は、工事半ばの山腹に突き当たり、樹木の根が所々にぶらさがり痛々しい。

工事前の樹林帯に入ると小さな沢が階段状に流れ落ちて、心の和む風情となっている。この沢も一体どのような変貌をとげるのであろう。周囲は、二次林であるが、ホウノキ、コハウチワカエデ、ハリギリ、アラカシなどの大木にウワミズザクラ、マンサクなど何十年も経て出来上がったこの里山を、災害防止とか、大勢の人に入つてもらうためとかの理由づけでの破壊行為を見過ごしてもよいのだろうか。伐採幅は広い所で30mにも達するようである。この工事をどのように受け止めたらよいのだろうか。

見学会に参加して 鬼頭 弘（尾張支部）

かつては、築水池に来るとオシドリに会えました。池の回りには、マンサクが咲き、鳥達が行き交う静かな所でした。

その築水池の北側が隙間だらけになり、道ができてシラカシやマテバシイなどが植えられています。当然、オシドリはいなくなりました。幾つかある湿地も危うい状態です。

虫も鳥も小動物もそこに居ついていたかつての林こそ、市民の憩いの場所として最適なはずです。生き物の生活の場所を乱した今の姿は自然の抜け殻といってもいい状態です。自然を求めてここに来る人は、自然そのものを楽しみたいという願いを持っているはずです。なされることは、今ある自然を良い状態に保ち、市民の憩いの場としていくことだと思います。

築水池北側の有り様を見た後、弥勒山麓を歩きました。ここにも広い道ができていました。管理車道だそうです。幅4～5mもある道がどうして必要なか理解に苦します。これからも車道を作る工事は続くそうです。

落ち葉が深く積もったふかふかの道を歩きながら、次のようなことを考えて、暗澹たんたる気持ち山を下りました。

自然との共生という言葉がよく使われます。本当に「共生」なのでしょうか。共生とは、お互いに利益を受けながら対等に生活することだと思います。人間と自然との係わりの歴史をみると、それは人間の自然に対する一方的な攻撃の歴史であったと言わざるを得ません。

自然の方は、人間がどうなろうと、この先何万年も姿を変えながら存続していくでしょう。人間はといえば、今の自然環境が失われれば、今と同じように生存することは難しくなります。自然と人間の関係は、本当は対等ですらないのです。現在の自然環境によってしか生きていくことができない人間の方が、自然の仕組みを賢く学び、考え方や生活のあり方をそれに添ったものに修正することが必要なのだ、と。

見学会と自然観察会 岩崎龍生（尾張支部）

価値観の違った人たちで見た森。

守る人、生態的に見る人、里山の薪炭林と見る人、自然に親しむ人、散策コースとして楽しむ人、人それぞれの見方がある。

保護を考えることで自然に親しむ人や散策を楽しむ人たちに自然保護を理解してもらうには時間がかかる。共鳴をしてもらえないのは自分たちの認識不足からきているのではなかろか？

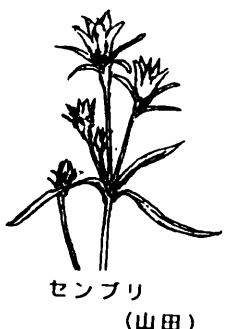
「自然保護につながる自然観察会」

- ① 学校の理科教育に対する野外での教育
- ② 採集と知識普及のための野外教育
- ③ 知識を通して自然の面白さを知つてもらうことを目的とした観察会
- ④ 自然保護運動を補完するものとしての観察会
- ⑤ 自然を身近に楽しみ、自然好きを増やす観察会

協議会が1981年に発足し、1996年で16年歩んで来て、①～③にこだわり続け最近やっと④が取り入れだした。それほど自然保護を一般の人々に理解していただくのには時間がかかります。

大竹会長が協議会ニュース創刊号で述べられた。「自然観察指導員のライセンスは取得しても、学校教育と違って、自然保護教育には体系もなく指導要項もありません。これは各自が自ら作り上げるしかないことは言うまでもありませんが、自然観察指導員は単なる自然のものじりでもなく、自然知識の切り売りが目的でもありません。常に自然に対し自己研鑽をしなければなりませんが、大切なことはそれにとどまらず、自然と人との媒体として自然に対応し、共に自然から学ぶ必要があります。」

このことを今一度ふまえていくことが必要な研修会でした。



センブリ
(山田)

>>>環境は今1 >>>>>>>>>>>>>>>>

冬の空は汚れている！

近藤盛英（名古屋支部）

>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>

落葉が舞い、木枯ら
しが吹く冬の空。こん
なに風が強ければ、空
の汚れも皆吹き飛んで
しまうのではないかと
思われがちです。



空（大気）の汚れは、二酸化窒素（NO₂）が指標としてよく使われています。NO₂は大気中の環境基準が定められている物質で、名古屋市内で27の常時監視測定局があり、愛知県内では名古屋市を含めると87の常時監視測定局があります。

この常時監視測定局は、その名のとおり、大気中のNO₂を常時測定しています。愛知県内の測定結果を経年変化でみてみると、図1のように、昭和48年度以降あまり変化がありません。言い換えれば、それほど改善もされていないということができます。

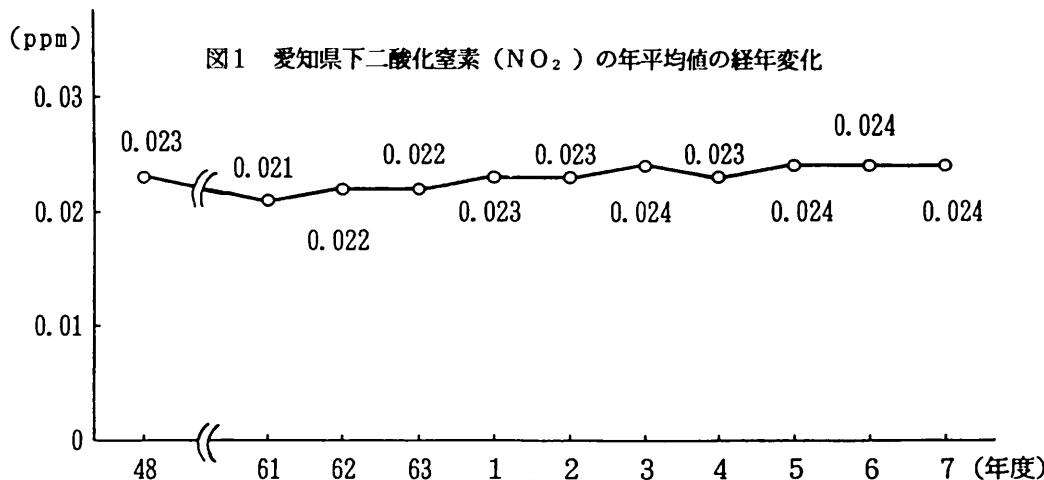
平成7年度の環境基準の不適合地点は2地点あり、名古屋市北区の水道局北業務所測定局と岡崎市の大平町測定局で、いずれも自動車の排気ガスの影響を受けている測定局です。

自動車の影響と言えば、昭和157年から平成7年までに愛知県内の保有台数は約2倍に伸び、そのうちディーゼル車の保有台数は約7倍にもなっています。身の周りでも、自動車の台数が増えたこと、中でも最近はディーゼル車が増えていると感じませんか。

この自動車の増加が、排ガス規制の強化と相殺して改善が進まないと言われているところです。

話が本題からはずれてしまいましたのでもとに戻しましょう。「冬の空が汚れている」これが本題でした。

大気中のNO₂の主な原因は自動車にあることは既に述べました。冬には自動車のアイドリングもあります。しかし、それだけが原因ではありません。そもそも、NO₂、あるいは窒素酸化物（NO_x）と言ってもいいのですが、これはモノを燃焼させるときに、空気中に約78%も含まれている窒素が同時に酸化されて発生されるものです。主として一酸化窒素（NO）が発生しますが、これは大気中で酸化されてNO₂になります。中毒学的観点からは、NO



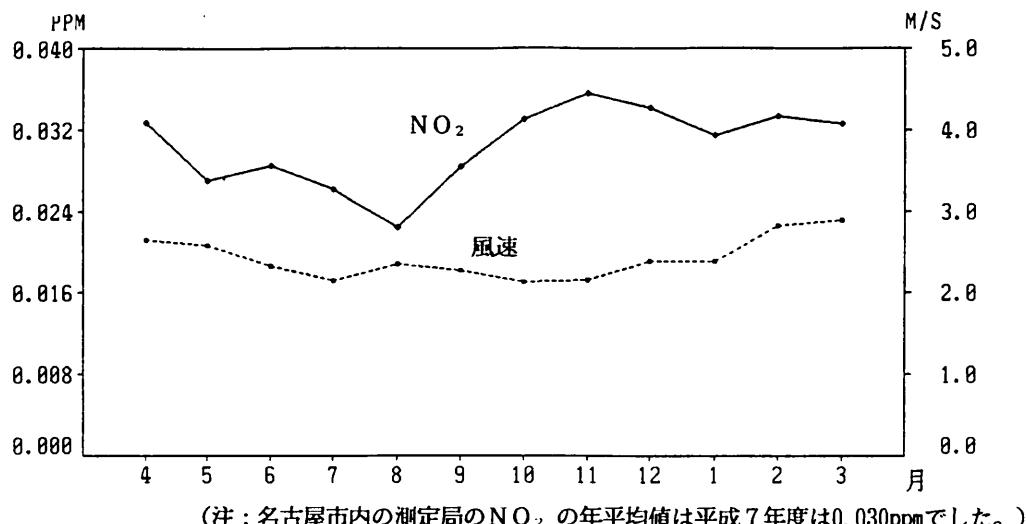
よりNO₂の方が毒性が強いため、NO₂に関する心が集中しています。因みに、NO_xは容易に肺の深部まで達し呼吸器に影響を与えると言われています。

また、話が横道にずれてしまいました。自動車以外の原因の話です。もちろん、工場や事業場の煙突から出されるNO₂なども問題ですが大気汚染防止法などの規制等により改善が進んでいます。それ以外の原因、それは暖房器具で

す。ビルや家庭の暖房もNO₂を発生させ冬の空が汚れる原因になっています。

さらに大きな原因があります。それは冬季に特に見られる気象条件です。はじめに述べました風の強さの問題です。寒いので体感的には強い風が多いように感じますが、実際は、冬季は全般に風が弱いのです。図2は、NO₂と風速の月別平均を示していますが、意外にもこのことがよくわかると思います。

図2 経月変化グラフ（平成5～7年度の平均：名古屋市）



冬季の気象条件で、もう一つ特徴があります。それは逆転層の問題です。一般には上空へいくほど気温は低くなりますが、冬季には上空の気温の方が地表付近の気温より高くなるという、いわゆる逆転層の出現する日が多くなることです。表を見ると、冬季に逆転層が出現する日が多いことがわかります。

冬季に逆転層が出現するのは、深夜から翌朝にかけてのことですが、このような状態が生じ

るとNO₂などの大気汚染物質は、上空の暖かい空気で蓋をされたようになり拡散されにくく、地表付近に留まることとなり、濃度も高くなりがちなのです。

どんよりした空の下での観察会、ひょっとしたら、そんな時は逆転層ができているかもしれません。



表 逆転層の月別出現日数（平成5～7年度の平均：名古屋市）

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
発生日数	3.3	2.3	0.7	0.3	0.0	2.0	3.7	11.7	10.0	9.3	4.7	3.3

森林公园植物園 「自然なるほどウォーク」紹介

高谷昌志(尾張支部)

森林公园植物園には、時々問合せがあります。「どんなおもしろいものがあるんですか」「見どころは何ですか」等々。そんな時応えるのは「広芝生、花壇、噴水、岩石園」など、人造的な施設ばかり。やはり「自然があります」じゃ「何にもありません」と言っているのと同じ理解しか得られないからです。

そこで考え出したのが、10月より開設した、森林公园「自然なるほどウォーク」です。これは目黒区の自然教育園を真似たもので、地図を見て観察ポイントに歩いていき、そこでクイズ形式の設問を観察しながら考えます。問題用紙の中には解説があり、「なるほどぉ」と楽しみながら散策できます。ポイントは6ヶ所前後、場所と問題は季節にあわせて毎月変わるので、何回来ても楽しめるわけです。

もちろん、他の公園のような花しょうぶ園や梅林、牡丹園もないという事情もありました。しかし“何もない自然”的価値、自然教室の楽しさを理解してもらい、その路線での利用促進を図りたいというのが動機です。

自然観察は本来、観察会に参加して感動を共有しながら歩くのが楽しみです。しかし「期日の都合がつかない」「知らない人ばかりだから」「何も知らないし」などの理由で、既成の観察会に入り込めない人が多いのではないでしょうか。自然観察の楽しみを多くの人に広げるためには“いつでも、気軽に、おもしろい”「なるほどウォーク」のような方法もあってよいと思います。みなさんも一度、お試しください。

- ・「なるほどウォーク」の用紙は、植物園入口、展示館、各ポイントに設置。自由にお取りください。
- ・団体利用の方は、ご相談ください。

- ・場所=植物園（月曜定休）
- ・開園=9:00～17:00
- ・入園料（大人200円）が必要です。

《観察ポイントの例（10月）》

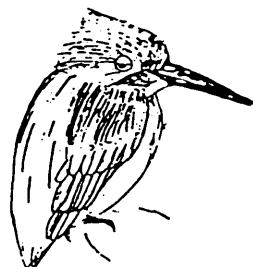
A. がけに直径8cmくらいの穴があります。なんの穴でしょう。

カワセミの巣穴です。水辺の宝石と呼ばれる美しい小鳥で森林公园でも時々見られます。ヘビなどに襲われないようにこんな所に巣を作るんですね。

B. 大きなクモの巣が観られます。じっくり観てみましょう。

ジョロウグモです。網はよく観ると円ではなく馬蹄形で又、レコードのLP盤のように

隙間が空いています。また、網も三重になっていて前後の網は脱皮したかすや食べかすをひっかけるのに使います。ベッコウバチなどの天敵に対するカムフラージュになっているようです。



定例観察会

武豊自然観察会

相羽福松（知多支部）

武豊自然観察会については、去る10月7日付け中日新聞に「注目を集めるエコロジー資格」の欄があり、その中の「自然観察指導員」でとりあげられました。突然の記者の取材にとまどい断わろうかと思いましたが、この資格を一般の方にも広く認識していただく機会かと応ずることにしました。経緯、目的などは記事に書かれていますが、編集部の依頼があったので、もう少し詳しく報告してみましょう。

【経緯】

私は自然が好きでしたので、たしか昭和58年に自然仲間の降幡氏（指導員）、榎原正躬氏（指導員）等となんとなく、講習会を受けたのが事の始まりです。当時は指導員になるつもりはなく、ただ興味本意でした。しかし、その後の社会の変化とともに、自然を求めたい人が多くなっていき「自然観察会」の言葉も市民権を得るようになりました。

3年前、私は定年退職を迎え、今後のライフワークを思案するなかで、資格を生かして自然の素晴らしさを人々に与えていきたいと決断したのです。当時、知多支部からの要請もあって「武豊自然観察会」の名称でふみきった次第です。

【概要】

- 1、春から秋まで毎月1回年6回やっています。猛暑と寒中は休んでいます。参加者の希望が増えれば実施する予定です。
- 2、フィールドは武豊町内を主としていますが、マンネリ化や参加者の希望などにより他市町村まで広げております。
- 3、毎月テーマを決めて主にそれに沿って進めています。特徴としては、ぶらぶら歩きの観察よりも2~4kmを歩くコースを設定してお

ります。健康的にも良いかと考えて歩くことを取り入れています。あれもこれもと細かく見るのではなく、ポイントでじっくりと観察。

4、開催日の案内と参加者とのつながりを目的として、ハガキを出してあります。何かと忙しい中、案内状一つとっても手間のかかる作業ですが、参加者との心をつなぐために必要な方法だと考えています。

5、参加者に特徴があります。地元の方をはじめとして、意外に他市町からが多いのです。名古屋市に近い地域の方ほど自然に関心があるようです。午前中に終わる会が多いですが、私は、一日をゆったりと自然に接していただこうと思って、弁当持参で午後1時30分ごろまでにしております。

ある意味では、地域の観察会のたたき台として始めたこともあり、試行錯誤の3年間でした。今後の課題としては

- 1、知多支部や地元の指導員の参加と協力を得て、植物をはじめ野鳥、昆虫、水生生物などテーマを広げていきたい。また、各回の担当者を決めて、年10回を目標にしたい。
- 2、子供に自然の楽しさを伝えたいから、子供を集めたい。
- 3、教育委員会などの後援をとりつけたい。が、「自然観察指導員」の資格を無視している。などですが、いずれにしろ長く続ける事が大切だと考えます。無理な計画や参加者募集は体力的にも精神的にも負担になり長続きしない。あくまで自然でマイペースの余暇活動の範囲で行っていきたいと思っています。観察会のやり方はいろいろな形式がありますご意見などをお聞かせ下されば幸です。

名古屋自然観察会

1996.11.30-Vol.8 11

なんじやもんじや通信

愛知県自然観察指導員連絡協議会 名古屋支部・愛知県長久手町大字長久手丁子田17-62 TEL 0561-61-4140 支部長 浅井勝司 方

活動予定

平成9年 1月 5(日) 9:30 大森湿地-----

11(土) 9:30 猪高緑地-----

12(日) 9:30 大高緑地-----

10:00 岳見高原-----

→18(土) 14:30 名古屋支部総会<名古屋市短歌会館・3F>-----

17:00 新年懇親会<未定>

19(日) 9:30 東山-----

25(土) 10:00 青少年公園-----

26(日) 8:00 熱田の森-----

-平成8年度年次総会に関するアンケート(はがき)実施についてのお願い-

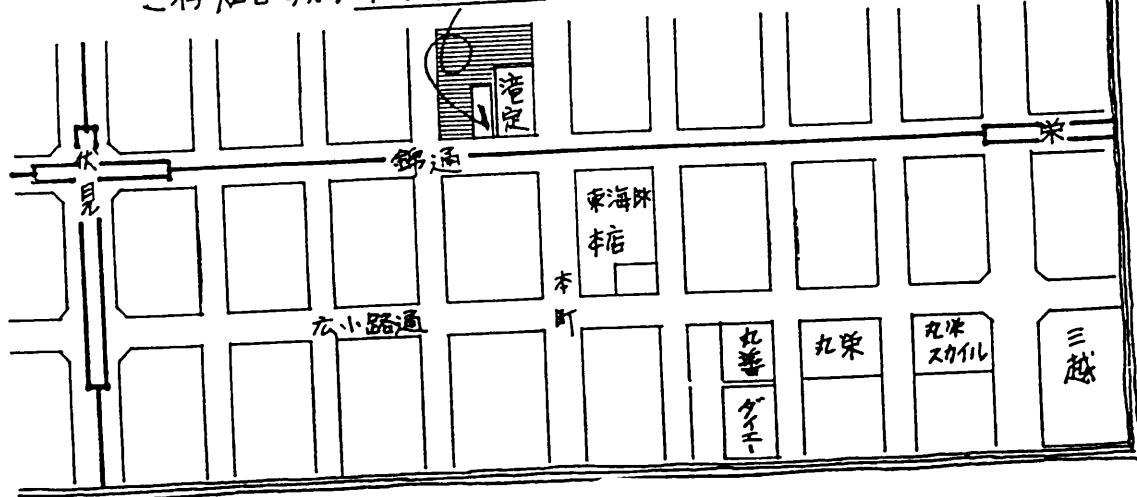
総会を開催するに当って、皆様のご意見を確認するために、

1) 観察会への参加について 2) 会費について

3) 協議会の活動について、などお尋ねします。

平成9年1月10日までに、事務局あて投函してください。

ご存知ですか! 市短歌会館(1月の総合の会場です。)



知多支部恒例の秋の研修旅行が去る11月23日（土）、24日（日）の連休を利用して行われました。目的地は瀬戸市海上の森と東栄町御園の天文台、鳳来町棚山高原ということで珍しく県内（'93年長野県南木曽方面、'94年長野県南信濃方面、'95年岐阜県御嶽山、'96年は春にも行っていて長野県姫川源流方面）の旅行でした。この企画、年々参加者が増えて今年は26人という多人数で賑やかに行われました。今回の支部だよりでは、この旅行のあらましを報告します。

第一日（11月23日）

午前7時50分に東海市役所駐車場に集合。途中で合流する予定の6人を除く20人が4台の車に分乗して出発。最初の目的地の海上の森に向かいました。愛知環状鉄道山口駅で北岡由美子さんと落ち合い、案内していただきました。

シマヘビ

山口駅で休憩中、早速近くの水田で“自然観察”をしていた子どもが長さ40cmほどのシマヘビを見つけました。陽気に誘われて出てきたのでしょうか、さすがに動きは鈍く、簡単に捕らえられ、しばらくの間さんざんオモチャに。ヘビは大の苦手という子もいて、歎声やら悲鳴やら、楽しい一コマでした。

モンゴリナラ・紅葉・ムササビの穴・・・

歩き出してすぐにモンゴリナラの出迎えを受けました。葉は殆ど落ちていて、林床には青々

としたカンアオイ。
クリ、サンショウ、
クスサンの蘭（スカ
シダワラと呼ぶそう
ですが、初めて聞きました）などを見ながら篠田池に出て、池のほとりで昼食をとりました。周囲の山々の紅葉が見事でした。

復路は別の道を辿って、ムササビの穴を見たりシイの実を拾ったりして戻りましたが、途中で後続が道を間違えたり、例によって道草を食ったりしていたので、予定の時間を大幅に超えて担当者をヤキモキさせました。

プラネタリウム・花祭り

その後は宿泊先の東栄町御園のスターフォレスト御園へ直行。このときも一台が道に迷って、全員が到着したのは午後6時30分頃。もちろん



辺りは真っ暗でした。

夕食後プラネタリウム見学。40分ほどのプログラムでしたが、旅の疲れか、そこかしこで寝息も聞かれました。プラネタリウムの後、御園天文台自慢の（？）60cm反射望遠鏡を見ましたが、あいにくの曇り空で、楽しみにしていた星空観望はできませんでした。

冬の東栄町は花祭りの季節。当日は足込というところで祭りが行われているというので夜中に花祭り見物。真夜中なのにたいへんな人出でした。

第二日（11月24日）

リス・ベニマシコ

前夜遅かったせいもあって、早朝の散策は個々あるいは少人数で思い思いに楽しみました。リスに会って喜んだ人、ベニマシコの可憐な姿に感激した人、大木の輪切りを拾った人、それぞれに満ち足りた時を過ごせたようです。

綾杉・オパール

遅めの朝食の後、東栄町にお住まいの伊藤六仁さん（一昨年まで東海市にお住まいで参加者の何人かは「東海市の自然」の作業で一緒にいました。自然を求めて東栄町に居を移されました。）と落ち合い、伊藤さんの案内で柱状節理、綾杉（杉の大木で、2本が根元近くで一体になっている。あやかり杉が名前の由来とか）などを見学。綾杉がまつてある社では、ムササビの糞を拾ったり巨大なミミズ（ダイコクミミズ）に驚いたり。

その後、鳳来町棚山高原へ行って、川原で昼食、石拾い。思いがけない上天気で（出発前の予報では雨でした）ボカボカと暖かく、昼食はおいしかったし、とてもいい気分でした。オパール※と聞いて目の色が変わった面々が多く、子どもを中心熱心に石拾いをしました。結構大きなものも見つかって歎声が上がっていました。

※オパール（蛋白石）

塊状または腎臓状・鍾乳状などをなして産する半透明乃至不透明の鉱物。成分は含水珪酸。－中略－貴蛋白石は宝石として装飾品などの制作に用いる。（広辞苑）

後日譚

子どもが持ち帰った蛋白石を、趣味で石拾いをするという人に見せたところ、一目で産地まで言い当てて、門外漢の私は大いに驚きました。

（文責 横原 靖）

自然の中で気になること

前回の機関紙で募集した『自然なにかとアンケート』の第1回は「自然の中で気になること」という質問でした。遠くの場所へ出かけたときに気になったことや自分のフィールドの中でどうにも嫌になったことは何ですかというものです。

7名の方からご返事をいただきました。拝見しますとなるほどとうなずけるものばかりです。私たちも自然観察会などをとおして、参加者の方にこうしたことをもっと知っていただくよう内容に含める必要があるのではないかでしょうか。では、寄せられた回答を次にご紹介します。

ふ ふ ふ ふ ふ

相羽福松（知多支部）

秋晴れの先日、伊勢湾が見える景色のよい山路を気分よく歩いた時のことである。

突然、両側の道端に大量のゴミが捨てられていて愕然となった。50mにもおよび、冷蔵庫や家具など、何やらわからない物が散乱している。原料のような物もあり臭い。事業者か個人か誰の仕業であるかわからないが、市街地から遠く離れ軽自動車でどうにか通れるほどの狭い道まで、よくも運んできたものだ。今までの爽快な気分はどこへやら、ふっとんでしまった。

産業廃棄物の不法投棄が問題になっているが、事業者のモラルの悪さには腹が立つ。ここはかつて、コモウセンゴケやイシモチソウやカヤツリグサ科などの湿地性植物が自生する良い環境の場所であった。が、このようなゴミ捨て場になっていては、もうダメで絶滅してしまっている。

自分さえよければ自然はどうでもよいという利己主義者がまだまだ多い。何とかならないものか。捨てた人の顔が見たいし、心が憎い。

ヒヨドリのヒナを育てる

青木雅夫（名古屋支部）

7月の末、巣から落ちて餌付けされたヒナを預かりました。雑食性だと知っていたが餌には苦労しました。それでも8月に入ると飛べるようになり、時々籠から出してやりました。朝出すると夕方まで、庭の枝から枝へ移り、陽が傾く頃羽根をふるわせて呼ぶので籠に入れてやる生活が続きました。9月に入ると2~3日帰らないこともあり、さらに10月には1週間もそのままで、もしかしたら死んだのではと思っていたら、9日目に帰って来た。この時はさすがに感激して喜んだ。

しかしこれではいけないと思い翌々日には、いやがるのを籠から出してやった。一直線に飛び去って行った。・・・

今考えると、8月の頃、他のヒナが寄って来ても全く無視していた。その時は気付かなかつたが、人間に飼い慣らされて、これから仲間に溶け込んで行けないのでは、もっと早く手放せばよかったのではと気になる日々です。

人が助けると思ってしたことがそうでないとしたら・・・

間瀬美子（東三河支部）

- 1 山肌を切り裂いて作られているゴルフ場
 - 2 山の形がすっかり変わってしまった碎石場
 - 3 山奥にまで大量に投棄されているゴミの山
 - 4 いつまで続く？紅葉と見まがう松枯れ
 - 5 どしゃの堆積で川底が上がってしまったダム上流の沢
 - 6 帰化植物の増加
 - 7 まっ暗で下草も生えない手入れされない植林地
- まだまだあります。多すぎましたか？

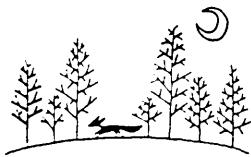
岩瀬直司（東三河支部）

「赤羽根文化の森」、「衣笠の森」、「風音の森」など、最近東三河地方の各地で森林公園の整備が行われています。

生活環境保全林としての整備だそうですが、出来あがった森はどこにでもある都市型公園のようです。

なぜ、そこにある森の特徴、自然を使わないのでしょうか。

私たちが手軽にふれあえる自然や森まで人工のものに変えてしまうのでしょうか。何か不安です。



鈴木友之（東三河支部）

昆虫（主に蝶類）の調査を長年続けていますが、大戦以降50年余を振り返ると、1970年代頃までは際立った変化を見出させませんが、近年になり地球温暖化傾向が無視出来ない時が来ている事を実感しています。

クロコノマチョウ（ジャノメチョウ科）は、1980年以降東三河地方に定着したものと思われます。

ツマグロヒョウモン（タテハチョウ科）は、1990年代に入り県西部から繁殖記録が多く聞かれるようになり、徐々に東へ拡大され、注目していたものですが、1993年以降、東三河地域でも確認記録が増加中です。

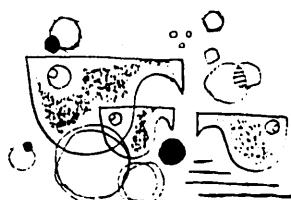
暖冬も途切れて、これら南方系の生物にも影響が出ることも考えられたが、今夏の様子からは、土着化はより確かと思われます。

今夏はセミ類が異常に少なかったこと等、自然の中から得られる無言のサインを見落さない努力が大切だと感ずる昨今です。

天野保幸（東三河支部）

最近と言ってもここ十数年前からですが、東三河地方の淡水魚相に変化がみられます。それは、どこの水域でも問題にされていることですが、在来の魚種が減って、移植されたり、稚アユの放流に伴って今まで見られなかった種類が目立つようになってきたことです。最も早くその影響が現れていたのはタナゴ類でしょうか。ヤリタナゴが見られなくなり、変わってタイリクバラタナゴばかりが目立つようになりました。これは産卵に利用するイシガイが底質の変化で減少したこととタイリクバラタナゴの進出が影響していたのでしょう。しかし、そのタイリクバラタナゴも産卵に利用するドブガイなどの二枚貝が減ったことに加え、ブラックバスやブルーギルの放流ですっかり見られなくなってしまった水域もあります。

人間の自然に及ぼす影響、見た目には豊富な自然が残っているように感じられるところでも、その中味は大きく換わってきています。見た目の自然に惑わされず、その中味をじっくり見つめていきたいものです。同じことは植物の世界でも言えることですね。気がついたらいつのまにか帰化植物に置き換わっていた。そんな光景を随所で見ることができます。今、豊橋市でも現存の自然を把握するための基礎調査を実施しています。どんな結果が出るのでしょうか。楽しみと、不安が入り交じっています。



人が集まるところ

降幡光宏(知多支部)

今年の夏、四国旅行をして国指定の天然記念物と国宝建築物を見学して回った。天然記念物を35ヶ所位見学したが、私たち以外の見学者を見かけたところは5~6ヶ所だけで、どこも見学者はパラパラで、比較的多かったのは高知県の竜河洞くらいだった。もっとも、天然記念物になっている巨木や植物の自生地などは神社や自然林の中にあり、ヤブカのしゅう撃がものすごく、よほど物好きくらいしか近付かない。

よく考えてみれば、国指定の天然記念物にしても、国宝建築物も国の宝であると思う。この大切な天然記念物などはよほど近くまで行かないとい地元の人も知らないくらいだった。一方、「スペイン・・・」「・・・ランド」「・・・ワールド」「グルメ・・・」などいわゆるカタカナの施設にワンサと人が集まる。人が集まる更にそれが刺激となり病原菌が伝播するみたいに、それに輪をかけて群がるみたいである。天然記念物はやはり静かなところにそっとして置いた方がいいみたいである。

行事案内

☆基礎研修会「雑木林の今・昔」(室内)

講師：鈴木隆司氏

尾張地方の昔の里山、今の里山と地形
地質との関係

期日：平成9年2月11日(休)

14:00~16:00

場所：中小企業センター8階第3会議室
(名駅前毎日ビル裏)

☆総会

期日：平成9年3月23日(日)

場所等は次号で案内します。

目次

フーのいた日々	1
会員紹介	2
大宮克美、吉村暁夫	
弥勒山麓の公園計画	3
冬の空は汚れている！	7
「自然なるほどウォーク」紹介	9
定例観察会	10
武豊自然観察会	
支部だより	11
(名古屋、知多)	
自然の中で気になること	13

編集後記

朝、目が覚めたら外は一面の銀世界。こんな日は誰よりも早く外に飛び出して雪の感触を確かめたります。きゅっきゅっという音を楽しみながら、いつもと違う周りの景色に目を奪われます。とまれ、今回もなんとか送っていただいた原稿をまとめることができました。送ってくださった方に感謝しますとともに、さらに多くの方からの投稿をお待ちしています。(近藤)

